
罪を愛した子 書き直し

アリュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪を愛した子 書き直し

【Zコード】

Z2773X

【作者名】

アリコ

【あらすじ】

この世界のこの国に来て、もう一年。とりあえず味噌とか醤油とかが恋しいです。

陰陽師の家系の血を引いてたり男装してたり執事になつたりする21歳の女……の子。自分の世界には帰れないけれど、まあ、頑張つて生きていく。

プロローグ

彼女はその罪を愛した。

だからこそ、彼女は罰を受け入れた。

罪には罰を。

それは明らかに罪だつた。彼女が犯した、彼女のものだけではない罪。

だけれど、彼女はそれを一人のものにした。罰を、自分だけのものにした。

彼女は罪を犯したことを決して後悔しない。

彼女は甘んじて罰を受け入れる。

認められなくてもよかつた。

許されなくてもよかつた。

彼女は一生その罪と罰を持つて生きていこうと思つていた。

それがどんなに辛くとも。

それが彼女の生き方なのだ。

その罪無くして、その罰無くして、彼女は。

彼女という存在は在り得ない。

プロローグ（後書き）

前に書いていたものの書き直しです。

第一章 始まりの一歩

日本で生まれ、日本で育つた私、広瀬秋は、一年前に『この世界』にやって来た。

他国とか、そんな生易しいものじゃない。

『この』は 地球とすら、呼ばれていない。

世界の名前は、イルノマティン。

イルノマティンと言つた前は、世界を創造したと言われるイルノマティ・ファクサーから名付けられている。

ファクサーとは、私の持つ言語で『神』と似た意味持つていて。もちろん地球上にそんな言葉は存在しないし、神話にもそんな神様は存在しない。

そして、地球との世界絶対的に違つと言つことがわかる証拠が、目に見えて存在する。

私の生家は陰陽師の家系だ。魔を祓い、式神を使役し、術を操る。

と言つても、自分は家系のあぶれものみたいなもので、正式な式神を使役していないし、生家の仕事に関わることはなかった。

それにしたって、変なものが見える使えるところのは、日本というか世界でも変わり種である。

地球は機械技術は向上の一途を辿っているし、変わり……かどつかは知らないが、特に日本では信仰宗教も退行している。

異世界と言う確固たる証拠……私たちで言う、『魔法』の存在だ。この世界では、生活の元に魔法の存在がある。

そして機械という概念が存在せず、信仰意識が世界共通で強く存在する。

そんな世界に、私は飛ばされた。
目を開けたときにはここにいた。

常識も、生活も、言葉も、文字も、何もかもが違うこの世界で生きてこられたのは、奇跡だと、今でも思つ。

ちなみに私がいるのは、ノーマアルアス国と言う。
年中を通して温暖な気候で、豊かな大地を有する、君主制国家。

つまり、国王と言つう存在がいる。

身分の区分は大まかに、国王、貴族、商人、平民となつてゐる。

そんな、常識違ひの私が、この国で今も生きていけるのは

他でもない、私の天使……間違えた、私のお仕えする坊ちゃん、
『ジーン・アルタイル』様のおかげだ。

朝日に輝く、金色の髪、澄んだ青色の目。

これを天使と言わずなんと言おうか……じゃなく、見田麗し
い、私の主。

初めて会った当初は12歳。私がここに来て、もう一年が経つ。
そして、同時に私が男として生活するのも、同じく一年目だ。

今、14歳の坊ちゃんは……

「お前なんて、大っ嫌い……！」

絶賛反抗期みたいなんですねうおおおおお……

すいません、心の治療薬って何処にありますかね?
心がぼつりと折れる音がしました……

朝の戦い

田覚めると、窓から田が昇り始めていたのが見えた。

この国では一年の気候があまり変わらない。少し肌寒いくらいの気温のときがあり、過ごしやすい。

田の出とともに起きなければならないので、それはとてもありがたかった。

顔を洗い、急いで身だしなみを整え、厨房まで足音に気をつけながら歩く。

厨房に着けば、料理長、そのほかの面々に挨拶してから、野菜の皮むきなど、雑用をはじめた。

一年間。それは長くよつて短い。

何十年と経つたよつた、一瞬で過ぎ去つたよつた、感覚も曖昧なそんな時間だった。

かつら剥きがくるくるとナイフで出来るよつになつたことが、二年といつ長さを現わしている。

最初は慣れない形の食べ物を剥くのと、これまた慣れないナイフを持たされて半泣きだった。

その間中料理長の罵声が飛び、そのまま殺されるんじゃないかとすら思った。

「アキ！皮むき終わったのか！－んな考え方してちんたらしゃがつて！」

「これだ。ちよつと下向いて手がゆっくりになつた瞬間に怒声が飛んでくる。

最初は「」の声に飛び上がるほど驚いたが、今となつては慣れが勝つた。

急に声を掛けられたにも関わらず、落ち着いた手で最後の皮を剥き、得意げな顔でやりと笑う。

「へつへーん！ 終わりましたよ！－最高記録です！」

苦い思い出をかみ締めながら剥いたのがよかつたのか、自己最高だ。というか、国レベルでも自分ほどかつら剥きが上手いのは片手程度の人数だらう？ という自信をアキは持っていた。

「無駄な特技で無駄に胸張つてんじゃねえ！－」んの、半人前が！－「ひどい！－無駄つて一回も言いましたね！？」

自分でわかつてゐるの！－とアキは顔を両手で覆つ。もひらん下手な演技だ。

そうすると、料理長からの容赦ない鉄拳が飛んできた。

「痛い！？ 暴力反対！！」

「くだらねえことしてねえで、とつと片付けでもしてやがれ！－」私の成長を労わってくれてもいいじゃないですか……とぶつぶつ呟く。だが、その口元は少しだけ弧を描いていた。

朝の一番忙しい時間も終わり、片腕を伸ばしストレッチをする。

「お疲れー。今日もなかなか良い一発をもらつてたね」

後ろからメイド服の女の子が声をかけてきた。

名前はライア。二年前までちらりと見たことがある、安っぽい生地では全く無い、本気のメイド服。それに一番似合つのはこの子だと思つていて。

ふわふわの茶色い髪に、まつげがばさばさと生えた大きい目。顔が比較的整つた人が多いアルタイル家の中でも、彼女は選りすぐりの整つた顔だ。

美人と言つよりは、可愛い系の顔をしていて、腰ほどもあるふわふわの髪がちょうどかわいい。アルタイル家の募集要項には、絶対顔の良さも入つていて思つ。

私が女だと言つことを決して言つことは出来ないが、彼女とはなんだかんだで親友みたいな感じである。

「ライア。笑いごとじやないですよ、ほんと一段られたときは星が浮かぶんですからねー!田の中に」

ああいたい。ちよういたい。咳きながら、それでもやはり口角は上がつてくる。

間違つてはいけないが、別にM^{マジ}と言つわけではない。

「そりやあな」

「おやつさんの一発がかるいわけねーべ!」

「目ん玉飛びでねえだけマジだと思えよ!」

「ライアちゃんかわいー!」

あひらひらから、料理長以外の料理していた人々が野次を飛ばしていく。

後誰だ、ライアをどうぞまぎれて賞賛してんの。

「ひどい！誰か私の」と可哀想だと、料理長横暴だ！とかないんですか！！」

「ないない」

「おやつさんガルール！！」

「ライアちゃんさいこーつ！」

「ひつこめアキー」

「ちくしょう恐怖政治が！後誰ですか、わっせからライアをドサクサにまぎれて口説いてるやつは！」

ライアは嫁に行くその瞬間まで私のものなんですよーーー！そう叫びながら笑う。

ライアはくすくす笑つて、手に料理を持つて「また後でね」と言つて厨房を出た。手を振る姿も可愛い。

ここまで周りの人たちと馴染めたきっかけは、やっぱり料理長だった。

身元不明な上、来て早々この家のトップの次男（ジーン坊ちゃん）付きになつたあげく、黒田黒髪ときたものだから、最初は誰も近寄りたがらなかつた。

だが、料理長はそんなことで差をつけたりはしなかつた。むしろ

差をつけてくれと思つぽくに平等に接してくれた。

皮むきが遅いとか、洗い物が遅いとか、眠そうな顔が気にくわないと。全部鉄拳付きで。

最後のヤツは断固抗議したが。ある日避けたら一回に増えたので、あれからは避けないよつにしてい。

決定的に周りの空気が変化したのは、ある日のことだった。

「まだ皮むき終わってねえのかー！成長しねえやつだ！」

そういうて鉄拳を食らわれ、毎日の積み重ねでぐわんぐわんしていく頭に、そのとき限界がきたのである。確かに何かが切れる音を聞いたのだ。

「今に見ててくださいよー料理長を唸らせるほどの皮むきの達人になるんですからーーー」

なるんですけど なるんですから なるんですから (Hーー)

宣言した。黒歴史と詮つヤツである。全員思つた。宣言した本人ですら思つた。

皮むきの達人つー……

一秒、一秒と誰も音を出さない時間が過ぎ、誰が声を最初に出したかはわからない。同時だつたかもしれない。その声は確かに、笑い声だつた。それは伝染していき、こうえた笑い声がいろんな所から響いてくる。

料理長の手前、誰も大口を開けて笑わないのが、本氣で辛いと思つた。

笑うならいつそ本氣で笑え！－ちょっと泣きかけた。皿の前料理長もちよつとブルブルしていた。

「まあ、唸らせてみる。その皮むきの達人とやらで」

いつものように威厳たっぷりを田指して話しているのだろうが、震えた肩は隠せていなかつた。くそつたれ！

そのことがあってから、皆気軽に話しかけてくるようになつた。にやにやした笑い付きで。

ちなみにちよつとの間あだ名が「達人」になつたのはある意味良い思い出だ。言つやつ言つヤツに蹴りをかましまくつた。

そんなこともあり、馴染む事は出来たが、何かを失つた氣はする。

「それにしても達人。皮むきマジで早くなつたなあ

「天誅！」

「ヤーヤしながら言つてきた副料理長に蹴りをかました。

脛を蹴ったため、足を抱えて悶絶しているが無視だ。

「まあまあ」

「でもほんと、皮むきも雑用も、お前は国のトップレベルだぜ！」

「まじでそろそろ料理長が唸るレベルになつてんna」

「お前の負けず嫌い半端ねえよな」

下つ端たちがなだめるように副料理長との間に入つてくる。口々にすごいすごいとか言つてゐるけれど、馬鹿にされている氣しかしない。

「最初はこんな笑えるやつだとは思わなかつたもんなあ」

「根性なしかと思つたら毎日料理長に殴られてもへこたれねえし…」

「料理長も料理長でなんの手加減もないしな」

「でもあの日からある意味で特別扱いだよな…」

人が頑張つてゐのを言いたい放題かこいつらー。

「達人、早く料理長を唸らせろよー！」

副料理長が憲りずにまた立ち上がりつてそうこつた。天誅！

いろいろと言い返す事があり口を開こうとした瞬間、頭に「いん」と鉄拳が下つた。もう一年間もくらいい続けた痛みだ。

「あつとやつやつて喋つてねえで、とつとと自分の仕事をしやがれー！」

正論だつたため、口を尖らせるだけで何も言わない。

「と思つたけどなんで私だけなんですか！！横暴！巔肩！！！」

「うるせえーお前はとつとジーン坊ちゃんでも起こしに行けやー！」

料理長のこぶしの重さは、馴染む前も馴染んでからも変わらない。
その重さに救われてきたなんて、絶対に言わないが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2773x/>

罪を愛した子 書き直し

2011年12月25日14時52分発行